

れは、学問的な態度として公正な評価と解釈に徹するという姿勢がなければできないことである。どうしても歴史の人物に関する評価には個人的な解釈が伏在しやすいが、本書の編者が努めてこれをまさしく中正に保とうとしていることが随所にうかがわれる。

ただ、これは作業量の限界と編者の理念にもとづくところであろうが、対象を物故者に絞っている。編者は序において、編集開始当初は生存・物故を問わず作業を始めたとされているが、「さまざまな検討を重ねた結果」として物故者に限定したとしている。賢明な判断であると判断されるが、遠からず本書を改訂される際には、その後の追補が期待されるであろう。

また、本編の人名事項以外にも、序における近現代日本医学史の概説、付録とされている「参考文献・資料」「年表」「書名索引」の充実ぶりも見逃せない。それらはいずれもそれだけで本来一書が編まれてしかるべきものである。特に、書名索

引は、本書編集のもとになった資料、収録人物の主著などが網羅的に50音順に排列されており、これだけでも日本近現代医学史の文献一覧として通用するものである。各人物の縁戚関係も可能な限り所載を試みており、この点の充実ぶりも本書の有用性を際立たせている。

本書の編者は『外地の医学校』(2009年、メディカルレビュー社)の刊行によって、戦前の日本支配地域における医育機関の成立と帰趨をきわめて客観的に記述して、学会を瞠目させた。そこで示された編者の高い識見と卓抜した調査能力は、本書編纂の「序曲」に過ぎなかったことを改めて知らされた。今後もこの偉業が後代に受け継がれることを願うとともに、編者による更なる成果が生まれ出されることを願ってやまない。

(瀧澤 利行)

[医学書院、〒113-8719 東京都文京区本郷
1-28-23, TEL. 03(3817)5600, 2012年12月,
A5判, 810頁, 12,000円+税]

サミュエル・ガース 著, 西山 徹 編訳,
高谷 修・服部典之・福本宰之 訳, 岡 照雄 序文
『薬局——十七世紀末ロンドン医師薬剤師大戦争』

現在の欧米の医学史研究において主流となっているのは、医学系と人文社会系の双方の学問の視点を組み合わせて1980年代から発展した<新しい医学史>である。研究の領域としてまず確立されたのは、当時の人文社会系の学問で注目されていたジェンダー、差別、エスニシティ、医療倫理などと直接的に関係する主題であり、具体的には、出産、看護、精神医療、帝国医療、患者の視点などであった。この流れの中で、薬に関連する主題が大きく取り上げられるのはやや遅れた。1993年にバイナムとポーターが編集・刊行した『必携医学史百科事典』の薬学の歴史を扱った章は、薬効と薬理学を軸にした古いスタイルの記述であるし、1996年にラウドンが編集した『西洋

医学図説史』では、そもそも薬の歴史を論じる独立した章がない。日本の東大駒場の科学史系の研究者を軸とする医学史研究においても事情は変わらず、2002年に廣野・市野川・林が編んだ『生命科学の近現代史』では、人種、優生学、生態学、性科学、フェミニズムなどの主題については独立した章があげられているが、薬の歴史に関する記述は章としては存在せず、索引にもほとんど登場しない¹⁾。

しかし、薬の歴史の研究は、個々の側面についてみれば明確に充実してきた。もともと研究の蓄積があった社会経済史系の医学史では、薬草の栽培や、国際商品としての薬に着目した優れた研究が世に問われ、文化史の方法を用いた医学史で

は、薬の広告などに注目した物質文明と消費社会の視点からの研究が行われている²⁾。イギリスの薬剤師については、18世紀には外科医術と組み合わせられて一般医 (general practitioner) の原型となり、中世の内科・外科・薬剤師という三つの別の職業の体制から、19世紀の「医師」という一つの職業が現れるダイナミクスの鍵を握ったという重要な議論がされている³⁾。これらの多様な研究を通じて、薬や薬学を主題にした新しい医学史の領域が確立へと向かっている。

このような国際的な研究状況を考えると、本書が日本で刊行されたことは非常に意義深い。本書は、17世紀末のイギリス・ロンドンの内科医と薬剤師の対立と闘争をめぐる重要な一次資料であり、内科医で文人のサミュエル・ガース (Samuel Garth, 1661-1719) が1699年に出版し、人気を博して1714年までに7版を重ねた詩作 *The Dispensary* の翻訳である。文学史でいうと、英雄詩の文体で同時代の人物や事件を風刺する「擬似英雄詩」と呼ばれるジャンルに属する。ホメーロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』などの叙事詩に範をとり、英雄の偉業が謳われる時に用いられる文体が、同時代の相対的に卑小で取るに足らない事件を描くのに意図的に用いられ、大仰な文体や誇張した修辞との落差が滑稽を作り出すことを狙ったジャンルである。トロイで戦う英雄たちが美しい鎧兜に身を固め、壮麗な盾を手にして槍で突き合う本来の英雄詩が滑稽に変形され、内科医や薬剤師が便器を頭にかぶり、盾の絵柄には放血治療用のヒルが痔の血を吸う場面が描かれ、浣腸器や尿瓶を手に携えて闘うと描かれているといえ、この作品の文学としての面白さが多少は伝わるだろうか。

作品の主題は、17世紀末のロンドンにおける内科医 (physician) と薬剤師 (apothecary) の対立、そして内科医たちの内部での対立である。王立内科医協会 (Royal College of Physicians) は、1518年に国王ヘンリー8世の勅許により成立し、17世紀半ばのイギリス革命と王政復古における王権の衰退と復活にもなってその権限も低下し伸長した。協会のもともとの主たる権限の一つは、ロンドン市内およびその周辺の地域における医療の規

制であり、同地で医療を行う資格を大学で医学博士号を取得したものに与え、その資格を持たないものが医療を行った場合に訴追し処罰することであった。この権限を通じて多様なタイプの無資格の医療者が規制され、民間呪術医療者やまったくの偽医者も含まれていたが、最も重要な対象は薬剤師たちであった。薬剤師は、制度的・理論的には、内科医が処方した薬を患者に売る職業であったが、17世紀のロンドンの薬剤師たちはこの分業システムを批判し、ついには1704年の「ローズの判例」によって、内科医の処方なしに患者に薬を売る権限を事実上獲得することになる。即ち、内科医と薬剤師が激しく対立しながら医療の基本の体制が変動する状況の中で書かれた時事的な詩作が本作品である。

この変動は、近代的な社会と、それにふさわしい医療の体制が並行して作られる過程であり、チャールズ・ウェブスターとハロルド・クックの古典的な研究がその意義を明らかにしている⁴⁾。社会と医療の近代性といったときに、政治、経済、科学思想、そして公共圏の4つの側面が考えられる。政治的には、王権と議会の権力をどう調整するかという問題と、内科医と薬剤師などの権限をどう折り合わせるかが重要であった。王権は王立内科医協会に医療を規制する権限を与え、イギリスが革命の中で模索した王権の位置づけは医療の体制に大きな影響をもった。経済的には、17世紀のロンドンには、人々が医療サービスを購入して対価を払うというモデル、すなわち医療の〈市場モデル〉が成立した時期であった。この拡大した市場に参入したさまざまなタイプの医療者を規制することが王立内科医協会の目標であったが、それよりも重要な問いは、王立内科医協会の立場が、市場モデルにふさわしいものかどうかであった。総じていえば、王立内科医協会の内科医たちが従っていたモデルは、侍医として仕える王や貴族などの社会の上流層の個人の生活を、自然の理解と古典医学の教養を通じて改善する〈牧者モデル〉であり、市場モデルに基づく新たな医療の需要を軸とした考えとはむしろ対立していた⁵⁾。思想的には、王立内科医協会にとって正統であった

ガレノスを軸とする古代の医学・哲学がその権威を失っていく時期であった。パラケルススやファン・ヘルモントの化学的な自然哲学が古代の哲学の権威に挑戦し、血液循環を発見したハーヴェイが大きな影響力を持ち（ハーヴェイは本書にも登場する）、ベーコン、ボイル、ニュートンらが観察と実験に基づく新しい自然哲学の内容と方法を作り出していた時期であった。その時期に、経験によって特定の病気の治療法を見つけたという経験主義に基礎を置くパラダイムが、薬剤師だけでなく内科医たちの中にも支持者を増やし、内科医協会は医学と医療の基本原則をめぐって分裂し、著者のガースの言葉をつかうと「我々の宿敵が身内にいるような事態」を作り出していた。そして最後に、この時期は、医療が議論されるべき公共圏が成立したという重要な時代であった。出版の普及、新聞・雑誌の普及、そして議論の場としての「コーヒーハウス」の成立を通じて、医療に関するさまざまな議論が、内科医と薬剤師にかぎらず、他の人々を「公衆」としてまきこんだ言説空間の中で決されるべきであるという規範が現れた。この状況のため、内科医も薬剤師も、自らの意見や立場を出版して公にして論争をしたのである。本書は、そのような公共圏で議論された医療についての一つの論説であるといつてよい。ガースが、公共圏のシンボルであったコーヒーハウスで患者を診療したことも、当時の医療の構造が近代社会のそれに变化していることを象徴するものである。

日本語への翻訳には、詩の本文よりも長い詳細な学術的な註と解説が付され、理解を助けるために88点の図版も添えられている。この作品は膨大な註がなければ理解することが難しい内容であり、17世紀末のロンドンの政治と医療の世界に

おいて重要であった多くの個人についての情報と、それを微に入り細を穿って風刺する古典文学の修辞の主題の解説があって、はじめて非専門家が読めるテキストである。この重要なテキストが英文学者たちによって日本語に訳され、多くの日本の医学史の研究者たちにとってぐっと身近になった。このことは、医学と人文社会の双方の領域にまたがる新しい医学史の風が、現代の日本にも吹いていることの証なのだろう。

文献註

- 1) W. F. Bynum and Roy Porter eds., *Companion Encyclopedia of the History of Medicine* (London: Routledge, 1993); Irvine Loudon ed. *Western Medicine: An Illustrated History* (Oxford: Oxford University Press, 1997); 廣野喜幸・市野川容孝・林真理編『生命科学の近現代史』（東京：勁草書房，2002）。
- 2) Mark Honigsbaum, *The Fever Trail: In Search of the Cure for Malaria* (London: Macmillan, 2001); Clifford M. Foust, *Rhubarb: The Wondrous Drug* (Princeton: Princeton University Press, 1992); Rima Apple, *Vitamina: Vitamins in American Culture* (Brunswick: Rutgers University Press, 1996).
- 3) Irvine Loudon, *Medical Care and the General Practitioner 1750–1850* (Oxford: Clarendon Press, 1986).
- 4) Charles Webster, *The Great Instauration: Science, Medicine and Reform 1626–1660* (London: Duckworth, 1975); Harold Cook, *The Decline of the Old Medical Regime in Stuart London* (Ithaca: Cornell University Press, 1986).
- 5) Harold J Cook, 'The New Philosophy and Medicine in Seventeenth-Century England', in David C. Lindberg and Robert S. Westman eds., *Reappraisals of the Scientific Revolution* (Cambridge: Cambridge U.P., 1990), 397–436.

(鈴木 晃仁)

[音羽書房鶴見書店, 〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-14, TEL. 03 (3814) 0491, 2014年7月, A5判, 170頁, 2,500円+税]